

機関番号：26401  
 研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2007～2010  
 課題番号：19720064  
 研究課題名（和文） 博物誌から国家史へ：18世紀末から19世紀のアメリカにおける歴史記述  
 研究課題名（英文） Natural History Turned National History: A Study of Late-18th- to Mid-19th-Century American Historiography  
 研究代表者  
 山口 善成（YAMAGUCHI YOSHINARI）  
 高知女子大学・文化学部・准教授  
 研究者番号：60364139

研究成果の概要（和文）：18世紀末から19世紀アメリカにおける歴史記述を特徴づけていたのは、第一に広範囲に渡る事物を一挙に捉えるパノラミックな視点だった。さらにこの時期から個々の史料が収集・保存・流通され始め、歴史の証拠データとして用られるようになる。個の典型性／特殊性にまつわる問題が生じたのもこの時代からである。また、絶えずうつろう個に対する関心は変化に対する新たな認識の表れでもあった。変化をいかに記述するかという問題に対し、当時の歴史家たちがまず目を向けたのは地質学的な層のイメージによる歴史観だった。

研究成果の概要（英文）：What informed American historical writings from the early national era through the nineteenth century was, first of all, a panoramic desire to grasp a wide range of things at one view. Moreover, historians started to collect, preserve, and diffuse historical documents during this period, and those individual data were incorporated as evidences for their historical generalizations, though always tinged with some ambiguities concerning their nature of typicalness and uniqueness. The interest in the individual had much to do with a new awareness of universal mutability, too. To describe historical changes, historians then turned to geology and its image of layered temporality.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,500,000	540,000	3,040,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学、文学一般、アメリカ史、歴史記述、博物誌

## 1. 研究開始当初の背景

本研究課題の構想は、その前段階としてジャレド・スパークスとフランシス・パークマンの歴史記述について分析を行う中で次第に固まってきたものである。スパークスの歴史は国家史レベルでオリジナル・ドキュメントの収集と体系化を試みた百科全書的な歴

史として定義することができる（山口「歴史学部スパークス教授の苦悶—19世紀前半のアメリカにおける歴史記述—」鷺津浩子・森田孟共編『イン・コンテクスト：

Epistemological Frameworks and Literary Texts』2003年所収）。また、パークマンの歴史に関しては当時「土地の文学」から派生し

た新しい学問、民族学がその下敷きになっていること、「旅」ないし空間移動が歴史記述の方法論となっていること、そしてまるで地図を眺めるかのようなパノラミックな視点が導入されていることを指摘した（山口「旅する歴史家—フランシス・パークマンの歴史記述における空間性と土地の記憶—」 鷲津浩子・宮本陽一郎共編『知の版図—知識の枠組みと英米文学—』2007年所収）。従来、19世紀初頭から中葉にかけて活躍したアメリカの歴史家たちは、啓蒙期以来の進歩史観をロマン派特有のモチーフやプロットを用いて物語に仕立てた「ロマンティック・ヒストリアン」とされてきたが（David Levin, *History as Romantic Art: Bancroft, Prescott, Motley, and Parkman*, 1967）、以上の研究成果から、パークマンにしてもスパークスにしても、その博物誌的な記述方法や「空間的」なテキスト構成を考慮せずに議論することはできないことがわかった。さらに空間的・博物誌的な歴史記述はある特定の歴史家たちによる奇抜な発想の産物ではなく、むしろより大きな社会的、学問的流れの一部を成すものと理解してよい。本研究は、その流れを「博物誌から国家史へ」という知識の枠組みの変化として捉えようとするものである。

## 2. 研究の目的

本研究は18世紀末から19世紀のアメリカに登場した歴史家たち（とりわけジェレミー・ベルナップ、ジャレド・スパークス、エマ・ウィラード、フランシス・パークマン）の著作を取り上げ、独立後間もないアメリカ合衆国がどのようにして自らの歴史を定義し創造するようになったかを分析するものである。具体的には上述の歴史家たちの著作を「土地の文学」という独立当時広く流通した博物誌のジャンルに関連づけ、これによって彼らの歴史に見られる非時間的・空間的な性質をあぶり出す。本研究の目的は、アメリカ歴史学黎明期のテキストに博物誌（ナチュラル・ヒストリー）から国家史（ナショナル・ヒストリー）へと枠組みが移行する契機を認め、非時間的・空間的な存在としてのアメリカが国家として時間化・歴史化される過程を例証することである。

## 3. 研究の方法

研究課題の性格上、文献リサーチ中心の方法をとった。主として収集と分析を行ったのは以下のジャンルの文献である。

### （1）一次資料

① ジャレド・スパークス関連文献

- ② ジェレミー・ベルナップ関連文献
- ③ マサチューセッツ歴史協会関連文献
- ④ エマ・ウィラード関連文献
- ⑤ フランシス・パークマン関連文献
- ⑥ ヘンリー・アダムズ関連文献
- ⑦ トマス・ジェファソン関連文献

### （2）二次資料

- ① 歴史記述、歴史思想関連
- ② 科学史関連（主に地質学の歴史）
- ③ トラベル・ライティング関連
- ④ 書、文字の歴史関連

なお、2009年度から2年間は筑波大学プレ戦略イニシアティブの研究プロジェクト「知識のコズモロジー、あるいは『わかる』とはどういうことか—『デザイン』の多義性を中心として」に参加することができ、ここで本研究課題に関わる情報交換をしたり、研究の方向性を確認したりすることができた。

## 4. 研究成果

研究課題である独立直後から19世紀半ばのアメリカにおける国家史の形成について、大きく分けて4つのポイントを指摘することができた。

### （1）空間認識との関連性

アメリカの歴史は「土地」と非常に強い結びつきを持っている。これはアメリカの発展が主として荒野の探検や領土獲得といった地誌的な活動によって果たされたことによる影響が大きく、とりわけ18世紀末から19世紀初頭に出版された歴史書においては、歴史と地誌は互いに交換可能でさえあるかのように扱われている。この観点から19世紀初頭の歴史家／教育者であるエマ・ウィラードの著作を取りあげ、当時のアメリカの歴史書がいかに関空間的な発想に支配されていたかを指摘した（論文“American Geographico-History: Visibility and Timelessness of Emma Willard’s Progressive Maps and History in Perspective”）。興味深いのはウィラードがただ単に歴史記述と地誌とを結びつけようとしていただけでなく、歴史の流れそのものを「地図化」しようとしていたことだ。これにより時間の経過は視覚的な見取り図として表現可能なものとなり、一目で流れを把握できるようになる一方、どこかそこには静的で非時間的な性質がつきまとうことになる。

このような視覚性の偏重はとりわけアメリカに特有の傾向と言えるだろう。セント・ジョン・ド・クレヴクールやアレクシス・ド・トクヴィル等の最初期のアメリカ論では、アメリカには常に「巨大さ」のイメージがつき

まとい、その巨大さを一挙にとらえるパノラミックな視点こそがアメリカ的なものの見方とされている（論文「大雑把さと些末さのあいだ—『アメリカの農夫の手紙』におけるアメリカ性の矛盾／矛盾のアメリカ性』）。フランシス・パークマンの歴史もそのようなパノラミックな視点を駆使した、きわめてアメリカ的なテキストとすることができる（論文“The Panoramic Point of View and Visual Training for Americans: ‘Bird’s-Eye View’ Stories of Two Travelers”）。

### (2) 「個」の扱い

パノラミックな視点と一見矛盾したかたちでアメリカ歴史記述を特徴づけているのが、個々の史料に対するこだわりである。ピューリタンの予型論の歴史にとって史料はあらかじめ規定された聖なる物語を確証づけるものでしかなかったが、18世紀末以降の歴史家たちはそれを新たな一般化の可能性をひめた「証拠」として見なすようになる。そして、ここで浮き上がってくるのが、個々の史料の特殊性と典型性の問題である。これはとりわけ個の自由を旗印に建設されたアメリカ社会そのものに密接な関係を持つ問題だった。18世紀末の歴史家ジェレミー・ベルナップの『ニューハンブシャー史』は、物語としての一貫性・全体性を志向する意図と個々の資料やエピソードの個別性をそのまま保存しようとする意図とが相互に入り乱れ、結果として歴史記述における「個」の扱いを考察する上できわめて興味深いサンプルを提供している（発表「自然誌から国家史へ—Jeremy Belknap, *The Foresters*における『歴史』の生成）。個をそれぞれユニークな個体と見なすのか、あるいは全体の一部とみなすのかという問題は、以降アメリカ歴史記述において繰り返し問われ続けることになる。

また、個に重点を置くのか、全体に重点を置くのかという問いは、独立当初のアメリカが国家として直面していた問題でもある。ベルナップの著作にも共和制や連邦制にまつわるエピソードは何度となく登場する。歴史家たちの「個」の扱いに関する問題は、アメリカ全体が抱えていた「個」の問題を正確に反映したものだったと言えるだろう。別の言い方をすれば、時代そのものが「個」に焦点を当てていた時代だったからこそ、「個」を起点とした歴史記述の方法があり得たのである。

### (3) 変化ないし時間性の記述の仕方

「個」に対する関心は、「変化」に対する新たな認識の表れでもあった。伝統的なキリスト教世界は基本的に変化のない、静的な世界である。それによると天地創造以来、世界

は一切変わっておらず、仮に新しい種が発見されたとしても、それはこれまで知られていなかっただけで実はずっと存在していたと理解された。秩序と普遍性の世界観である。しかし、いくら不変の永遠性を求めたとしても、世界は明らかに変化している。変化はやがては老いて死にゆくものたちにとって最も基本的な事実だからだ。アーサー・O・ラブジョイとミシェル・フーコーが指摘する18世紀末から19世紀にかけておこった歴史観、時間観における変化とは、つまりはそのような人間の有限性に関する新たな発見だった。それまではタブロー（ないし「存在の大連鎖」）全体の中に位置づけられた「種」としてそれぞれの個体は認識されていた。たしかに「種」として想定されれば、仮に一個の個体が消えたとしても「種」としては変化がない。しかし18世紀末から19世紀にかけて起こったのは、「種」ではなく「個」を基礎ユニットとする考え方であった。そして、個とはそもそも有限であり、時間的な変化に宿命づけられた存在である。こうして西洋の世界観にあらたに時間性、そして歴史性が導入されるようになったのである。（論文“The Ideas of History, or How Was ‘History’ Historicized in Nineteenth-Century Western Thought?”）

ゆえに当時の歴史記述は、今では当たり前になっているものの、当時としてはきわめて革新的な使命を新たに帯びることになった。すなわち、「変化を記述する」ということである。やがては19世紀後半にかけて進化論的な歴史観がこの任務を担うことになるが、その前にまず援用されたのは地質学だった。ジェイムズ・ハットンやチャールズ・ライエルらにより、世界の（地球の）歴史は飛躍的に長くなり、その永遠にも似た時間は地層の重なりによって説明されるようになる。フランシス・パークマンの歴史が興味深いのはこの文脈においてである。パークマンの歴史がパノラミックな視点を駆使した空間的な記述に基礎をおいていることは先述したが、彼はさらに時間性や変化を「深さ」の次元で表現しようとしているのである。彼は若い頃から地質学に強い関心を示しており、また彼の歴史のデータには当時の地質学からの成果も少なからず含まれていた。彼の歴史意識に地質学の提示する時間性が影響を与えていたことは間違いない。（発表「歴史の深さ：19世紀アメリカの歴史記述における地質学の想像力」）

### (4) 歴史家たちのネットワーク

18世紀末、新旧両大陸での革命を経て、それまで公にされてこなかった文書が次々と明るみに出てくるようになる。当時の歴史家たちがまず着手したのはそれらの史料の収

集だった。個人レベルでの収集も驚嘆に値するが、それよりもさらに興味深いのは彼らが互いに史料を共有するネットワークである。そのネットワークにより、彼らは歴史を学問として確立させ、また国家結束のモデルを提供していた。

論文 “The Republic of Letters: Organizing Historical Knowledge in Early National America” では、トマス・ジェファソンやマサチューセッツ歴史協会など、アメリカ最初期の史料収集事業を題材に書のネットワークの意義と効果について考察した。興味深いのは、これらの事業において「集めること」と「保存すること」にあわせて、「印刷・配布すること」が常に強調されていたことである。ジェファソンの蔵書、国会図書館、ハーバード大学図書館など、初期の図書コレクションは皆大規模火災や敵軍の略奪によって蔵書や史料の紛失を経験している。ゆえに史料を集めることと同様、いかにそれを守るかということは最大の関心事であった。そこで出来上がったのが、可能な限り書籍や文献を大量複写し、それを各資料館に配布し共有することで、共同で書を保存するネットワークであった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

- ① Yoshinari Yamaguchi, “The Ideas of History, or How Was ‘History’ Historicized in Nineteenth-Century Western Thought?” 『高知女子大学紀要文化学部編』 60 (2011): 13-24. [査読の有無：有]
- ② Yoshinari Yamaguchi, “The Republic of Letters: Organizing Historical Knowledge in Early National America” 『アメリカ文学評論』 22 (2011): 18-37. [査読の有無：無]
- ③ Yoshinari Yamaguchi, “Toward the Impersonality of History: Science and Inductive Reasoning in 19th-Century American Historiography” 『高知女子大学文化論叢』 12 (2010): 61-72. [査読の有無：有]
- ④ Yoshinari Yamaguchi, “The Elasticity of the Individual: Early American Historiography and Emerson’s Philosophy of History” *Seijo English Monographs* 42 (2010): 233-255. [査読の有無：無]
- ⑤ 山口善成 「大雑把さと些末さのあいだ—『アメリカの農夫の手紙』におけるアメリ

カ性の矛盾／矛盾のアメリカ性」『高知女子大学文化論叢』 11 (2009): 33-45. [査読の有無：有]

- ⑥ Yoshinari Yamaguchi, “The Panoramic Point of View and Visual Training for Americans: ‘Bird’s-eye View’ Stories of Two Travelers” 『アメリカ文学評論』 21 (2009): 1-25. [査読の有無：有]
- ⑦ Yoshinari Yamaguchi, “American Geographico-History: Visibility and Timelessness of Emma Willard’s Progressive Maps and History in Perspective” 『アメリカ文学評論』 20 (2007): 46-69. [査読の有無：有]

[学会発表] (計 7 件)

- ① 山口善成 「歴史の深さ：19世紀アメリカの歴史記述における地質学の想像力」日本アメリカ文学会第 49 回全国大会 (2010 年 10 月 9 日、立正大学)
- ② 山口善成 「歴史の非人格性へ：Henry Adams の歴史科学に見る「個」の溶解と昇華」中・四国アメリカ文学会第 39 回大会 (2010 年 6 月 12 日、香川大学)
- ③ 山口善成 「隠喩としてのパノラマ」筑波大学プレ戦略イニシアティブ「知識のコズモロジー、あるいは『わかる』とはどういうことか—『デザイン』の多義性を中心として」ワークショップ (2010 年 3 月 21 日、つくばセミナーハウス)
- ④ Yoshinari Yamaguchi, “A Touristic Point of View and Visual Training for Americans: ‘Bird’s-eye-view’ Stories of Two Tourists” Department of British and American Cultural Studies Special Conference, Chukyo University (Chukyo University, December 20, 2008)
- ⑤ 山口善成 「自然誌から国家史へ—Jeremy Belknap, *The Foresters* における『歴史』の生成」日本アメリカ文学会第 47 回全国大会 (2008 年 10 月 11 日、西南学院大学)
- ⑥ 山口善成 「アメリカのとらえ方—歴史とパノラマとバリンブセスト」筑波大学アメリカ文学会 (2008 年 4 月 5 日、筑波大学大塚キャンパス)
- ⑦ 山口善成 「レッドバーンのガイドブック：19世紀アメリカにおける旅と自己形成」中・四国アメリカ文学会 (2007 年 12 月 8 日、広島女学院大学)

[図書] (計 1 件)

- ① 鷺津浩子・宮本陽一郎編 『知の版図—知

識の枠組みと英米文学ー』（悠書館、2007年）：77-103.

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山口 善成 (YAMAGUCHI YOSHINARI)  
高知女子大学・文化学部・准教授  
研究者番号：60364139

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし